

中学生のライフ・イベントと抑うつ・不適応

並木典子

I. 問題と目的

人が環境の中で生きている以上、大人だけでなく子どもも、毎日のようにストレスにさらされている、と言えるだろう。そこで本研究は、中学生のストレス、特に、日常的なストレス（ライフ・イベント）と抑うつ・不適応との関連を見ていくことにする。

最初の児童・青年を対象としたライフ・イベント尺度を作成した Coddington (1972) は、「否定的なイベントと肯定的なイベントは両方とも、再適応を要求し、それにストレスフルである」と考えているが、実際には、肯定的なイベントよりも否定的なイベントの方が不適応に関連するという知見がいくつかの研究から支持されている。ストレスの緩衝効果については、認知されたサポートがストレスを緩衝する効果を持つことが言われている。また、家族の環境の緩衝機能について Burt et al.(1988) が検討しており、凝集性が高く、統合されていて、表出性が高いという家族の認知は、肯定的な心理的機能と関連していたが必ずしも緩衝効果を持たない、と述べている。

これらは主に個人の経験するライフ・イベントとストレスの関係を扱った研究であるが、家族を一つの単位として家族の経験するイベントとストレスの関連を見たものに、家族ストレス論に依拠した研究がある。家族ストレス論は、どのような家族が危機に陥りやすいのか、どのようなプロセスを経て危機に陥り、危機から立ち直っていくのか、という視点から考えられたもので、原形となるモデルに、Hill (1949) の ABCX モデルがある。この ABCX モデルは、「A (ライフ・イベント) と -B (家族の危機対応資源) と -C (家族がイベントに与える定義) が相互作用して -X (危機) を作り出す」(McCubbin & Patterson, 1983) というものである。家族ストレス論に依拠した研究のほとんどは、妻あるいは夫婦を対象としたもので、子どもまでは視野に入られていない。

人が個人としてだけでなく家族の一員としても生活している以上、個人として経験するイベントについて調べるだけでなく、家族システムの個人への影響も考えるべきである。個人がイベントに対処するように、家族も家族のイベントには家族としての対処をしているのである

から、個人のライフ・イベントとストレスの研究と、家族ストレスの研究を統合して考える必要があるのではないだろうか。そこで筆者は、個人のライフ・イベントと家族のイベントを分け、それぞれが別々のプロセスを経て個人のストレスに影響を与えるのではないかと考えた。ストレスに直接影響するのは、個人のライフ・イベントそのものと、イベントに対処するに当たっての親のサポートについての満足度であろう。家族のイベントに関しては、家族のイベントそのものが直接影響するのではなく、イベントの発生やそれへの対処の結果変数としての家族システムが、家族の一員である子どものストレスに影響を与えると考える。他に、親の子どもへの関わり方も影響するだろう。なお、このモデルは、単身赴任や離婚などの家族システムの構造を変えるような大きなイベントを経験していないものを前提とする。家族構成の変化を経験しているか否かによって家族の適応感の違いがあることは考慮に入れたほうが良いと思われるからである。

したがって、本研究は、ふたり家族の青年のライフ・イベントとストレスの関連を示した因果モデルの検証を行うことを目的とする。また、父親が単身赴任している家族やひとり親家族の青年がいれば比較をする。

II. 方法

本研究は、中学生を対象とし、以下のような尺度による質問紙に回答してもらった。

1) フェイスシート：回答者の家族の属性を把握するだけでなく、両親がそろっており、家族の移動を経験していないものをスクリーニングすることも意図しているため、家族構成を尋ねる項目と、現在の父親の単身赴任及び引越しの有無についての項目からなる。

2) 個人のライフ・イベントに関する尺度：中学生個人が経験すると思われる事柄について、既成の青年向けのライフ・イベント尺度を参考にして、8項目を作成した。回答者には、最近1年間の経験の有無（個人イベント有無得点）、困難さの度合（個人イベント困難度得点）、親のサポートの有無（親のサポート得点）、親のサポートの満足度（親のサポート満足度得点）についてそれぞれ評定してもらった。

3) 家族のイベントに関する尺度：家族が経験すると思われる事柄について、既成の青年向けのライフ・イ

ント尺度を参考にして、9項目を作成した。回答者は、最近1年間の経験の有無(家族イベント有無得点)、困難さの度合(家族イベント困難度得点)、両親の対処の有無(親の対処有無得点)、対処への父親の関与の度合(父親関与度得点)、回答者自身の協力度(対処への協力度得点)についてそれぞれ評定した。

4) 両親の関わり方に関する尺度と家族関係に関する尺度: 父親及び母親の回答者への関わり方を Schaefer (1965) の Children's Reports of Parental Behavior Inventory から選んだ15項目で、家族関係を Bloom (1985) の Self-Report Measures of Family Functioning の「凝集性」と「表出性」から選んだ10項目で、それぞれ現在の状態と1年前との比較について評定してもらった。

5) 抑うつ・不適応に関する尺度: 抑うつについては Kovacs (1980/1981) の CDI、不適応については CMI の不適応に関する項目を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

この調査では一つの尺度についていくつかの異なる回答をしてもらっているため、尺度得点別で α 係数を算出したところ、「親の対処の有無」「対処への父親の関与度」「家族システムの比較」の α 係数が低かったため、分析からはずした。また、両親の関わり方に関する尺度と家族関係に関する尺度(現在の状態と1年前との比較)の因子分析を行ったところ、現在の父親の関わり方では「支配的態度因子」と「支持的態度因子」が、現在の母親の関わり方では「受容的態度因子」と「統制的態度因子」が、現在の家族では「凝集性」と「開放性」の各因子が抽出された。以後、各因子ごとの合計得点を分析に用いた。

1. ふたり親群について

パス解析を行ったところ、仮説を支持する結果が出た。イベントの経験が、個人に関するものは直接に、家族に関するものは間接的に、抑うつや不適応に影響を与えている。また、「親のサポートへの満足度」と家族システムの「凝集性」が抑うつや不適応を緩和する方向に働いている。また、「父親・支配的態度」は抑うつと不適応を、「母親・統制的態度」は不適応を増加させる効果を持っている。イベントの経験については、個人に関する

ものも家族に関するものも「困難度得点」の方が「有無得点」よりも関連が強いのだが、Swearingen & Cohen (1985) はイベントの経験の単純累計が最もよくストレスの大きさを反映するとしているが、本研究の場合は、回答者による主観的な評定によって重み付けられた得点の方が強い関連を持ったことになる。

「家族の凝集性」へは、「家族イベント困難度」と「学年」が負の方向の影響を、「対処への協力度」と父親・支持的尺度」「母親・受容的態度」が正の方向の影響を与える。従って、「家族イベント困難度」と「学年」が抑うつと不適応に間接的に影響し、「対処への協力度」と「父親・支持的態度」「母親・受容的態度」がストレスを間接的に緩和する効果を持っていることが言える。

2. 単身赴任群、母子家庭群、及び父子家庭群について

尺度間相関について三つの群に共通して言えるのは、抑うつよりも不適応の方が多くの得点と高い相関関係にある、ということである。片親が常にいないという状況は、不適応を助長させるような要因を持っているのかもしれない。母子家庭群の場合はイベントに関する得点だけが抑うつや不適応と相関があるが、父子家庭では「父親・支配的態度」が、単身赴任群の場合は「母親・統制的態度」が抑うつや不適応と正の相関関係にある。

単身赴任群は「対処への協力度」の平均点が低く、父子家庭群が「家族のイベントの困難度」を高く評価し、「対処への協力度」も高いことと対照的である。母子家庭の場合は、困難度の平均点が高いわりには協力度はあまり高くない。母子家庭群の「抑うつ得点」の平均点は20点を超えており、イベントの困難度の高さが強く影響しており、平均値が3群中最も高かったことが、「抑うつ得点」の高さにつながったと思われる。

3. 単身赴任群と引越し/転校群について

引越し/転校群は抑うつの平均点がほぼ20点で高いものになっているが、「親のサポート満足度得点」がかなり高く、「不適応得点」も他の群より低くなっている。転校による新しい環境への適応の課題が乗り越えられると、かなり適応的になるのではないだろうか。

単身赴任群の場合は、適応の問題は抱えていないが、母親の統制的な態度が多くなり、それによって抑うつや不適応を感じるようになると思われる。